

# 『紅史』 著作年次考

若 松 寛

ツェルパ・クンガードルジェ (Tshal pa Kun dga' rdo rje) 著『紅史』(原題:『テプテル・マルポ Deb ther dmar po』又は『フウラン・テプテル Hu lan deb ther』)は、稲葉正就・佐藤長両氏によってその全文の和訳が発表されたことにより(『フウラン・テプテル—チベット年代記』法蔵館, 1964年。以下、『年代記』と略称), わが国では最も良く知られたチベット文史書の一つとなっている。この和訳本が、正確な訳文と詳細な注釈とあいまって、わが国のチベット史研究者のみならず、モンゴル史研究者の重視するところとなったのはここに贅言するまでもない。海外でも中国の周清澍氏が和訳本を取り上げて若干の論評を試みている(『藏文古史—《紅冊》』『中国社会科学』1983年第4期)。

『紅史』の著作年次の問題は、『年代記』中の「解説」に於て詳細に検討された。この結果, “著作年次は1346年であることに間違いない”(同書, 18頁)と断定された。以来, この結論が定説となっていることは周知の如くである<sup>1)</sup>。

稲葉・佐藤両氏が翻訳に用いられた『紅史』のチベット文テキストは、1961年シッキム(Sikkim)のガントク(Gangtok)にあるチベット学ナムギェル研究所(The Namgyal Institute of Tibetology)から“The Red Annals, Part 1”としてチベット活字で出版されたものである。これより先1958年に稲葉氏はシッキムを訪れた際、当地のデンサバ(Densapa)氏の所蔵する草書体(dbu med)写本を撮影する好運に恵まれたのであった。この写本こそが活字本の底本となったものと訳者は判断しておられる。両氏の言に依れば、両本を仔細に対照すると、語句の細かい相違が相当数見受けられるとの由であるが、和訳は活字本に拠って翻訳することに努め、ただいかにも意味が通じない場合に限りデンサバ氏写本に拠ったという(『年代記』18頁)。このような活字本が従来学界で唯一利用できるテキストであったのである。

1982年に到って、筆者は中国で出版された『紅史』のチベット文校本を内蒙古大学蒙古史研究所から寄贈を受けた。校注本の書名は下記の如くである。

《Deb ther dmar po (紅史)》(Tshal pa Kun dga' rdo rje <蔡巴・貢嘎多吉> 著, Dungdkar Blo bzang 'phrin las <東嘎・洛桑赤列> 校注, 民族出版社, 1981年10月第1版。以下, 《紅史》と略称)

本書中の「編者序」(pp. 1~4)に依れば、テキストの整理に当たって, “外国で出版された『テプマル』と、他にも民族文化宮にある『テプマル』2種, 西藏自治区檔案局にある『テプマル』各

種の7本を前後して仔細に対照し、校勘を11回重ねた後、本書を整理した”と記されている。ここで外国で出版された『テプマル』と言うのは、シッキム活字本を指したものに違いない。このように中国には『紅史』が6種もあることになり、実に驚嘆の外はない。但しこれら6種の中国蔵本(いずれも写本らしい)の来歴については何ら説明が加えられていないのは遺憾である。

これら中国蔵本に関して注目すべきことは、西藏自治区檔案局所蔵の『テプマル』2種の中に、他の諸本に見られない相当量の文章が存することである。それら闕文とされる部分を「編者序 (Sgrig pa po'i gleng gzhi)」の指摘に拠って掲げると次の如くなる(便宜上、それら闕文について、《紅史》中の収録箇所と、《Red Annals》・『年代記』中挿入されるべき箇所とを示しておく)。

1. サキャパの歴史の末尾とパンチェン (=Paṅ chen Shākya shri) 戒律師承の間に、教法伝授歴代法師系統とチベット歴代堪布系統、上律宗弘通等、2頁余りがある。(《紅史》第14章〈教法伝授歴代法師系統と歴代堪布系統、講法系統史 Bstan pa'i gtad rabs dang mkhan brgyud/bshad rgyud byung tshul〉の全章に相当、55~59頁。因に《紅史》では、全篇を26章に分かつ。《Red Annals》及び『年代記』中の欠落箇所は、各々25丁表5行目以下、128頁1行目以下。)

2. タクポ・カーギュのタクゴム・ツルチムニンポ (Dwags po Bka' brgyud kyi Dwags sgom Tshul khriims snying po) の歴史の末尾と善逝パクモドゥパ (Bde gshegs Phag mo gru pa) の歴史の間に、カルマパ・トゥイスマケンバ (Karma pa Dus gsum mkhyen pa), カルマパ・パクシ (Karma pa Pakshi), カルマパ・ランチュンドルジェ (Karma pa Rang byung rdo rje), カルマパ第四世 (Karma pa Sku phreng bzhi pa) の歴史等、合計32頁程がある。(《紅史》第23章〈カルマ・カーギュ史 Karma Bka' brgyud byung tshul〉の全章に相当、84~121頁。《Red Annals》及び『年代記』中の欠落箇所は、各々36丁裏1行目以下、177頁末尾以下。)

3. ラパ (Lha pa) 派の歴代座主史の末尾と本書の跋文の間に、クンタン・ラマシャン (Gung thang Bla ma Zhang) からラマ・サンギェオェセル (Bla ma Sangs rgyas 'od zer) までの、ツェルパ・カーギュ (Tshal pa Bka' brgyud) の歴史、10頁がある。(《紅史》第25章〈ツェルパ・カーギュ史 Tshal pa Bka' brgyud byung tshul〉の全章に相当、126~149頁。《Red Annals》及び『年代記』中の欠落箇所は、各々38丁裏8行目以下、194頁2行目以下。)

以上の如く、“〔上記の〕前後合計40余頁程が過去に国内外で刊行された全ての書に欠落しており、これらを今回新たに補充したのである。”

さて『紅史』の著作年次の問題に対して、編者トゥンカル・ロサンチンレー氏は注目すべき見解を提出している。

“この『テプテル・マルボ』は、第6ラプチュンの丙戌、1346年に執筆し始め、カルマパ第四世ロルペードルジェ (Rol pa'i rdo rje) が祖国内地からチベットへ帰られた年、第6ラプチュンの癸卯、1363年に執筆し終ったのである。”(《紅史》、「著者の歴史紹介 Rtsom pa po'i lo

rgyus ngo sprod」 2頁)

このような見解の論拠が今回増補された第23章〈カルマ・カーギュ史〉の中に存することは明らかである。そこでは、カルマパ第四世(1342<sup>②</sup>—1383年)の事蹟が詳細に述べられているが、但しその記述は、彼が卯年(1363年)に中国内地からチベットへ帰還した<sup>③</sup>ことで終わっているのである。

“卯年(癸卯, 1363年) 2月に北方から来て, 3月に入った8日にこちらへ到着した。(yos lo zla ba gnyis pa la byang ngos nas yong nas zla ba gsum pa theb bton pa'i brgyad pa la yar slebs byung ngo//)” (《紅史》121頁)

この記事が、《紅史》全篇中、年代上最も新しいものなのである。

『紅史』が1346年以降に成った事実を示す例として、カルマパ三世ランチュンドルジェを讃えた以下の文は実に興味深い。

“嘗てセチェン皇帝(世祖フビライ)を除いて、以後の皇帝で帝位に11年以上在った方は誰もいなかったが<sup>④</sup>、この皇帝(順帝トガンティムル)は帝位に癸酉の年(1333年)に登ってから、己亥の年(1359年)に帝位27年が経ち、今なお御長寿であられるその方の王国をも平和にしたのは、法主宝(カルマパ三世)の恩恵である。(Sngon se chen rgyal po ma gtogs phyis kyi rgyal po gang yang rgyal sar lo bcu gcig yan chad bzhugs pa su yang med pa la/rgyal po chen po 'di rgyal sar chu mo bya lo byon nas sa mo phag gi lor rgyal sa lo nyi shu rtsa bdun lon zhing da dung yang sku tshe brtan pa'i rgyal khams yang bde ba la bkod pa de/chos rje rin po che'i bka' drin yin no//)” (《紅史》103—104頁)

上記の文は1359年当時に記されたものとみなされる。このように考えると、《紅史》には1346年以後も年を追って順次増補が加えられていったものと推定して良からう。

以上述べた如く、《紅史》中に1363年までの記事が含まれていることは歴然たる事実である。そうした事実に基づいて初めて本書巻末の跋文中の偈の直前に置かれた一句“至元23年に〔記す〕。(Kri dben lo nyi shu rtsa gsum la//)” (《紅史》151頁) に対して一つの解決策を編み出すことができる。即ち、1363年は順帝の至正23年に当るから、原文の至元を至正の誤記とみなすものである。このようにして『紅史』の正しい著作年次を至正23年とみなすのが最も合理的であろう<sup>⑤</sup>。

ところで『年代記』の「解説」中(19~20頁)、著作年次に関して一つの重大な問題提起がなされている。それは、『紅史』に Samp・ネウト(Gsang phu Ne'u thog) 寺(1073年アティーシャの直弟子ゴクロツァーフ・レクペーシェラフ Rngog lo tsā ba Legs pa'i shes rab によって創建)の歴代座主(但しリンメーパ Gling smad pa 系)の記述があるが、その中に座主在位期が1346年よりはるか後代に属するものが見られるというのである。その記述とは以下の如くである。

“〔第15代〕ロブンチェンポ・シャーキャションヌウ(Slob dpon chen po Shākya gzhon nu)は、ツァルクンタン(Tshal gung thang)に釈説学堂を設立し、6年を経てネウトに迎えられ、座主に27年間おなりになった。……かれ(=シャーキャションヌウ)の後に、〔第16代〕ギヤマワ(Rgya ma ba)が8年間座主になった。かれの後に、……〔第21代〕ロブン・ロトエセンゲ(Slob dpon Blo gros seng ge)。

申の年(1320) ロブン・シャーキャションヌウとロブン・トンドゥパペル(Slob dpon Don grub dpal) 師弟がクンタンの釈説学堂を設立してから6年を経たとき、ロブン・シャーキャションヌウはネウトに行った。クンタンにおいては、ロブンチェンポ・トンドゥパペルが、寅(1326)から午〔の年〕(1366)まで41年間、3つに善巧であることによって<sup>6</sup>釈説学堂をよく護った。……御子のうちの長男シェラプギェンツェン(Shes rab rgyal mtshan)は午の年(1366)に法嗣として敬礼されて、かれが14年間座主におなりになった。卯の年(1387)からロブン・ロトェサンボ(Slob dpon Blo gros bzang po)が11年間座主におなりになった。〔次に〕ロブン・ソェナムペル(Slob dpon Bsod nams dpal)が任せられた。”(『年代記』151～152頁。参照、《紅史》70～71頁)

ここに挿入されている西暦年次に依る限り、『紅史』の著作年次は1346年どころか、1363年をすら越えて、14世紀末頃までに繰り下げなければならないであろう。『年代記』の訳者が前掲記事中の十二支を西暦年次に換算する上で拠り所としたのは、シャーキャションヌウのネウトの座主に迎えられた年次を1326年に比定するレーリッヒの説である。『テブゴン』に拠れば、シャーキャションヌウはネウトの座主を丙寅の年から27年間勤めたと言う。レーリッヒはこの丙寅の年を1326年に比定したのである(《The Blue Annals》p. 329)。しかしこの比定には疑問がある。なぜなら、『テブゴン』では、ネウトの歴代座主の任期を通算して、ゴクロツァーフ・ロデンシェラプ(Rngog lo tsā ba Blo ldan shes rab)の没(1109年)してより以来、シャーキャションヌウの前代のオェセルゴンポ('Od zer mgon po)までの期間を“156年”としているからである(Ibid.)。この数字に基づくと、シャーキャションヌウの座主就任年の丙寅は、実は1266年でなければならないことになる。従って『年代記』の前掲文中の西暦年次は全て60年繰り上げなければならないのである。そのように改めることによって前掲文中の年次も著作年次と何ら矛盾を来たすものではないことが判明するのである。

以上考察した如く、《紅史》の著作年次を1363年とみなすロサンチンレー氏の見解は、筆者としても妥当なもの認めたい。

なお、ロサンチンレー氏の言に依れば(《紅史》、「著者の歴史紹介」3頁)、『紅史』にはクンガードルジェ自身による続編があるという。『紅史』自体自らの書名を“テプテル・マルボ等の最初のもの(Deb gter dmar po rnam kyid dang po)”(《紅史》1頁)と記しているのみならず、チョクリ・ガワンテンジン('Jog ri Ngag dbang bstan 'dzin)著『ツェルクンタン寺志(Tshal gung thang gi dkar chag)』にも、この『テプテル・マルボ』に補遺として『テプテル・智者の意楽(Deb ther mkhas pa'i yid 'phrog)』と称するものがあると記していることを同氏は指摘する。同氏は、この書と同じものとみられる『テプテル・マルボの補編・智者の意楽(Deb ther dmar po'i kha skong mkhas pa'i yid 'phrog)』と題する長方形の写本を文化大革命以前に西藏自治区政治会議(Bod rang skyong ljongs chab srid gros tshogs)の蔵書中に実見したことがあるが、それが今でも存在するか捜してみる必要がある、と言っている。

その書は内容上、初めにチベットの王統を述べるが、その部分は簡略であって、むしろ主体は、

クンタン・ラマシャン (Gung thang Bla ma Zhang) 以来のツェルクンタンのラマ系譜と、ポン・ダルマジョンヌ (Dpon Dar ma gzhon nu) からクンガードルジェ自身の父モンラムドルジェ (Smon lam rdo rje) までの歴史であるとのことである。

こうした続編を念頭に置いて、クンガードルジェは『紅史』の序言に“『テプテル・マルボ』等の最初のもの”と書き付けたものとロサンチンレー氏は推定している。この推定は極めて合理的である。『年代記』の「解説」(19頁)の如く、序言全体を後世の附加とみなす立場に立って、“『テプテル・マルボ』が複数になっているのは、『新テプテル・マルボ (Deb ther dmar po gсар ma)』が1538年に書かれた後に〔序言が一筆者〕附加されたことを物語るものであろう。”と考えるのは穏当を欠くものと言わざるをえない。

最後に、校注本について感想を述べると、校勘記が附せられていないことが何としても惜しまれる。校注本とシッキム本とを対照すると、語句の異同が夥しく見受けられる。なかんずくシッキム本の闕文は、前掲の三大箇所他に、短文ではなお数箇所がある。一例を挙げると、パンチェン・シャーキャシュリー (Paṅ chen Shākya shrī: Kha che paṅ chen とも称す) の戒律師承 (sdom rgyud) の記述中、シッキム本は、ケンポ・トゥージェペル (Mkhan po Thugs rje dpal) の後に次の3代を欠いている。

“その後にケンポ・クンガーペル (Mkhan po Kun dga' dpal), その後にケンポ・ツルチムペル (Mkhan po Tshul khriṃs dpal), その後にケンポ・サンジョン (Mkhan po Sangs gzhon)” (『紅史』60頁。参照、《The Red Annals》p. 25b., 『年代記』129頁)

異同箇所の是否の研究のためにも校勘記がどうしても必要である。今後ロサンチンレー氏には、詳細な考勘記と併せて諸本の来歴の発表を要望しておきたい。注に関しては、本文中の重要な人名・地名・寺院名・仏教用語等に対して実に総計683条も施されており、いずれも本文の読解のために頗る有益である。《紅史》の校注に対する同氏の労を多とすると共に、本書が学界で広く活用されることを願って筆を擱く。

#### 注

- ①但しその後、佐藤長氏は、『アジア歴史研究入門』第4巻〈内陸アジア・西アジア〉(同朋舎出版、1984年)中の〈内陸アジアIVチベット〉の章では、『紅史』はクンガードルジェが“1346年ころに書いたもの”(同書、200頁)と慎重な見解を示しておられる。
- ②カルマバ第四世ロルペードルジェの生年について、《紅史》(109頁)ではこれを甲午 (shing pho rta) に作るが、明らかに壬午 (chu pho rta=1342年)の誤記である。なぜなら、《紅史》自体に於て、カルマバ三世ランチュンドルジェ (1284—1339年)の没後、その転生者が出現するまで“3年”を要したと言い(同書、108頁)、又、カルマバ第四世自身は、“御歳11の時、壬辰の年 (chu pho 'brug lo=1352年)にウィ (Dbus)へ行った。”(同書110頁)と記されている。これらの点からすれば、カルマバ第四世の生年が1342年にあったことに疑問の余地がない。因に『テプテル・ゴンポ』では、カルマバ第四世の生年を庚辰 (lcags pho rta=1340年)に作る (G. N. Roerich, 《The Blue Annals》 Delhi, 1976., p. 494)。

なお、トゥンカル・ロサンチンレー氏は、注(495)に於てカルマバ第四世の生年を1340年に置いている(《紅史》422頁)。《紅史》には校勘記が付されていないので、上記の誤記が西藏自治区檔案局蔵本2種中、いずれ

にも存するものなのかは残念ながら判らない。

- ③カルマバ第四世は、元朝のトガンティムル帝 (Rgyal po chen po Tho gan thi mur=順帝) の招請に応じて、戊戌 (1358年) 4月20日にツルブ (Mtshur phu) から出立し (《紅史》112頁。『テブゴン』では同年5月20日に作る。《The Blue Annals》p. 500)、子年 (庚子、1360年) 12月19日に大都 (Ta'i tu) に到着した (《紅史》119頁。『テブゴン』では年だけを記して月日を示さず。《The Blue Annals》p. 501)。彼が大都から帰途についたのは、寅年 (壬寅、1362年) 1月14日であった (《紅史》120頁。『テブゴン』では出立の年月日を示していない。Cf. 《The Blue Annals》p. 503)。
- ④世祖以後、順帝以前の皇帝で在位11年以上に及ぶ者が実際には一人存在する。世祖の直後に立った成宗がそれである。この皇帝は1294年に即位して、1307年に没した。その元号としては、元貞が2年、次いで大徳が11年ある。但し大徳の実年限は10年1月である。《紅史》に言う11年以上とは、一つの元号の長さで数えたものであろうか。
- ⑤“至元23年に”の句に対して、トゥンカル・ロサンチンレー氏は注 (683) に於てこう言っている。  
 “至元23年とは、元朝の皇帝オルジョイトゥ (Ol jo'i thu) の最初の元号なる元統 (Yon thung) に3年あり、それが過ぎてから改元して至元 (Kri yon) と称するが、これには6年しかないので、どういうことだろうか。” (《紅史》462頁)
- 上記の文中、オルジョイトゥ皇帝 (成宗) と言うのは、トガンティムル皇帝 (順帝) の誤りである。一方、『年代記』の「解説」(21~22頁) にあっては、この“至元23年に”の句に対して非常に頭を悩ませた挙句、以下の如き推定に達している。  
 即ち、元末に至元が6年あった後、至正に改元された事実を著者クンガードルジェが考慮せず、至元のままで数えたのではないかと臆測して、至元23年を至正17年、1357年とみなす。しかる上でこの一句を、その直前に記されている「昔堯帝……」の文とこれに続くオルジョイトゥ皇帝の代の詔勅 (実は武宗の至大2年発布のものという) とに懸けて、それらは後人が1357年に附加したものとみなすという推定法である。「解説」中のもう一つの有力な推定法は、「昔堯帝……」と詔勅は後代に附加され、その際に誤った著作年次が書き添えられたのではないかと考えるものである。  
 「解説」は、上記の二つの方法の“どちらかであると考えるたい”とし、いずれにせよ“昔堯帝……”以下は後代の混入か附加と考えて間違いないであろう。”と結論している (なお、最後の跋の偈も、同様に後代の混入か附加と考えられている)。
- ⑥“3つに善巧であることによって”の原文は、“mkhas pa'i bya ba gsum gyis (智者の三事によって)”である。智者の三事とは、講述 ('chad pa)、弁論 (rtsod pa)、著作 (rtsom pa) をいう (《紅史》注362、参照)。

(1988年8月15日受理)